



# 会長挨拶

大学生協共済連 会長理事

## 濱田 康行

皆さん、こんにちは。濱田でございます。

師走のお忙しい中、本大会に出席していただきまして誠にありがとうございます。

この大会を準備してくれた職員の方々、特に学生諸君に劳いの言葉を送りたいと思います。まだ終わったわけではありませんけれども、大変感謝しております。

会長の挨拶というのは、実はこれだけ言えばおしまいなのですが、それだとあまりにも短いので、共済事業というものが世界を舞台にしたとき、日本という舞台に置いたとき、今どんな常態にあるのかを、良い機会ですので皆さんにご紹介したいと思います。

「Mutual」という言葉を使うのですが、そのシエアがどうなったか。それは下の方にありますけれども、2007年に24%、4分の1弱だったのですけれども、2016年には26.8%に拡大した、という数字が発表されています。わずか2.8%の動きですけれども、もとの金額が巨額、これから出てきまなければならない、2.8%の伸長というのはいくらも大きい。それだけ世界レベルで見ても、共済に対する期待は大きくなっているのだということが確認できます。

もう少し詳しく見る。いわゆる掛金収入ですね。2007年と2016年に分けて書いてありますけれども、この10年間に2600億ドル増えた。円に直すと為替相場によって値が違いますが、皆さんから掛金を預かってそれを運用、大切に預かっているわけですから、その総額は2兆2200億ドル増えた。1兆ドルといったら、ちょっと途方もない金額なのですけれども、10年間でそれだけ増えたというふうに報告されております。

何々Mutualとかというふうに呼ばれているところで、どれだけの人が働いているのかということになると、働く人というところがあります。約5万人増えています。113万人の人が働いています。ですから、共済事業は雇用にも貢献しているのだということが出来ます。

肝心の組合員ですが、組合員はどのくらいいるのか。これは、10年間で約1億1000万人増えました。主に、東南アジアの国とかアフリカの国とか、そういう国々で増えていると報告を受けています。なぜ、共済がこれだけ10年間で大きくなる事ができたのか。それは、実はここで話すことができないくらい、いろいろな理由があるのだと思います。ここで言うおくべきことは、2008年という年にリーマン・ショックという金融界を揺るがす大事件があつて、それでいわゆる銀行業もそうですが世界の保険業もかなり痛手を受けた。その痛手が、我々の世界には小さかったということがいえるのだらうと思います。それが何を意味するかというのは、宿題にしておきます。

す。このところは差しさわりがありませんので、皆さんにプリントをお配りしていただきたいと思いますけれども、今年の8月末で締めた1年間で見ると、成績は二極化しています。非常に大きく減少したところもあります、あえて口に出しませんけれども。少し減少したところもある。大きく伸長したところもある。その大きく伸長したところに我々の組織が入っているということ、皆さんに報告することができます。

それはあえて閉って示してありますけれども、全国の会員生協・ブロックの共済担当の方々、そして新学期セールから始まって頑張ってくれた学生諸君、アドバイザーの皆さん、そして我々共済連職員の努力の賜物だったと思っております。会長としてとても感謝しております。

「私たちは良い共済を提供している」。良いというのは、質的にも価格的にもそのアフターケアについてもいろいろな面です。それから、「私たちは大学に不可欠の存在である」。大学そのものではないけれども、大学に不可欠の存在である。というわけで、誇りを持って仕事をしたいと思っております。

本日は総会なのですが、あえて総会らしからぬ会長挨拶をいたしましたけれども、ぜひ皆さんの協力で意義のある総会にしていきたいと思います。そういうふうに思っております。

最後に、英語になるのですが、「えっ」と思われるかもしれませんが、赤字になっているところだけを見てください。これは、先ほど紹介しましたICMIFの会長、Hideさんというベルギーの女性の方が今会長をなさっているのですが、その方から手紙が来ま

した。我々のことをいろいろ書いて褒めてくれます。上の方の赤字で、*support students in their college life*、*まさに我々のキープするものをちゃんと認識してくれています。その次のパラグラフ、Student Mutual Aid (Kiyosai)、「共済」というのをびったり訳す英語がないので、こういうふうになるのですが、「それはシステムだ」と書いてあります。そのシステムはどういうはたらきをしているのかという、*students help each other in order to ensure students to keep studying*、「勉学生活をキープするために、学生がお互いに助け合う」、そういうシステムだということを、ICMIFの会長が認識して、それを手紙に書いてきてくれています。*

途中で省略して、その下です。*ICMIF is very proud to represent such organizations like UCMAP with such high quality initiatives*、このUCMAF、というのが我々の組織の頭文字です。*proud*、というのは「自慢」だとか「誇らしさ」です。だから、「ICMIFは我々のようなものがメンバーになってくれていて、大変誇らしい」と、そういうふうに出てくるんです。まあ、手紙ですからそんなに批判してくるわけがないのですが、こんな内容の手紙をいただいているというわけです。ここまで来られたのも皆さんのお陰です。

最後に、この次に向けての話をしておしまします。皆さんのお陰で良い成績を残すことができました。いよいよ来年ということになるのですが、言わずもがなですけれども、早めに計画を立てる。ほとんどのところはこの段階は終了していると思います。その次は計画通りに行動する。そして、行動できたかどうか時折振り返る。これが非常に大事で、それをチェックというふうにして書いてあります。できなかつた部分については反省して前進する。ということ、みんなで力を合わせて来年に向けていい結果を出したいということです。

最後に、私がうちの職員、それから現場で働く人たちに会う機会があると、いつも言っている三つのメッセージを書いておきました。それは、「私たちは意義のある仕事をしている」、

